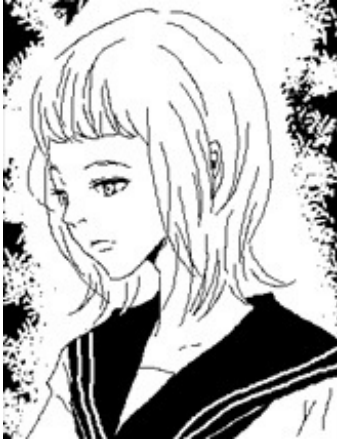




月のヒカリ
III

著：モ力

絵：Nanaha



Konoha Hikari
木ノ葉 ヒカリ

高校2年生になったばかりで、性格は真面目で明るい性格、弓道が得意。
2年前父親が再婚し家族が増え今は両親と兄との4人暮らしだがヒカ리는家族に馴染めずいつも孤独を感じている。
学校の弓道場で矢を放ったさいに不思議な光に導かれ異世界セブンズドアに迷い込む。



Getuka
月下

髪の色は黒で少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的な龍神人の青年。
闇を抑える不思議な力を持っている。
ヒカ리의前では冷たく接しているがいつも気に掛けている。



Zin
ジン

とても元気で明るい少年。

ラオスの兵士で、ユーリスとの国境を監視する城の副官をしている。ある事件を切っ掛けにヒカリに命を救われヒカリと行動を共にすることに・・・。

戸惑いと決意の狭間で

セブンズドアこの世界は七つの大陸に別れている、そのなかでもガイヤは大きな大陸でセブンズドアの陸地の約1／3を占めている。

ガイヤには二つの特徴を持った土地があり一つは水が豊かで緑が生い茂っている、もう一方は雨が余り降らない草原地帯で鉱山があり資源が豊富に取れた。

それぞれの土地に住む人々は自分の領土に無いものを求めて争いを繰り広げていた何年も何年も・・・。

どうしても相手の領土が欲しい人々は神を捕らえその力で争いに勝利しようとした、だがそれは神の怒りに触れセブンズドア自体が崩壊してしまう、大地は裂け水は渴れはてた。

過ちに気づいた人々は神に許しをこい願った怒りを沈めて下さるようにと。

だが、人間に囚われた神は弱り力尽きようとしていた。

神は人に言った。

この世界はお前達人間の為に創り上げた世界、滅ぶのも生かすのもお前達次第だ。

私の命はもう尽きようとしているだが人と交わるにより生き永らえることが出来よう、神と交わることを禁じられしこと人よ罰を受け入れ今を生きるかそれともこのまま滅ぶかお前達次第だ。

この世界はお前達の世界さあ選べ・・・。

今を生きる事を選び罰を受け入れたことで大地の怒りは収まったと言われている。

「龍と交った人々を龍神人と呼びガイヤの人々は王に向かい入れその時出来た国がガイヤ全体を領土とするユーリスなのです。

その後、内乱が起こりまた二つの国に別れてしまいました、今ガイヤでは昔のように戦争が耐えませんが最近では神がお怒りなのか闇がこの世界に現れ人を取り込んでいます、闇に支配されると心を喰われ人でないものになるそうです。」

少女は、話し終わると悲しい顔をしヒカリを見た、ヒカリは上の空でまどの外を見ている。

「ヒカリ様！！」

「はいはい、で罰でどんものだったの？」

キラキラと少女の瞳が光。

「はい！！罰とは自然に帰ることだったのです。

私達セブンズドアの住人はみな獣人なのは罰のせいなのです、段々生まれてくる者が獣に近づいてきているとか、さっきもお話ししましたがこの世界は人のための世界人がいなくなれば消えるさだめなのです・・・。

そして、それを救うのが光の者だと言われています、そう救世主はヒカリ様なのですよ。」

と尊敬の眼差しでヒカリを見た。

「もーそんな目で見られても困るんだって！」

と迷惑そうな顔をする。

「ですが事実です！もう少し自覚をお持ち下さらないと教育係のリンが怒られます。」

と腰に手をあてながら言う、ハイハイとヒカリは知らん顔している。

「ヒカリ様！！私は悲しいです・・・」

今度は泣き落としだヒカリはこれに一番弱かった。

「リンごめんね。聞くからそんな顔しないでよ。」

と慌ててホローする。

ヒカリは今城の客室で寝泊まりしていた。

扱いは良くなに不十分な夢に見たお姫様生活だ、最初は楽しくお姫様ライフをヒカリも楽しんでたのだが段々楽しめなくなってきた、ヒカリに対して周りの期待は大きい、段々周りの状況が分かってくると夢の生活どころではなかった。

そして、手始めにリンがヒカリのもとに教育係としてやって来たのだ、救世主たるものセブンスドアの歴史や伝統を知っていただかないととのことだ。

リンは小柄で一見少女のようだが本人が言うには大人のレディだそうだ、チョロチョロ動く姿はハムスターのようで可愛かった。

性格も明るくヒカリの面倒を面倒くさがらずみてる城のなかではヒカリを本当に光の者なのか疑う者もいて、たまにだが嫌な思いをすることがあった。

すねるリンを見てヒカリは

「ねぇリン、月下は今どうしてるの？」

「それが、噂ではまだ封印の間にいらっしゃるとか・・・

でも、大丈夫ですよ直ぐに出て来られます」

あれから1ヶ月、月下はまだ封印の間から出てこないヒカリは複雑な気持だった早く出てきて欲しいような困るような、まだどんな顔をして月下に会えばいいのかヒカリは分からずにいた。

「ヒカリ様そういえば今朝は朝議に出られたとかどうでした？」

「うっ！」

とヒカリが朝議と言う言葉に反応する。

「まあなんとか・・・」

と言葉を濁す。

「？」

リンは首をかしげている。

今朝の朝議にヒカリは招かれ大河と一緒に出席していた。

「ようこそヒカリ様さぁお座り下さい」

朝議が行われる部屋には真ん中に長方形の長いテーブルが置かれその周りにズラリと身分が高そうな人々が取り囲んでいた、異様な威圧感があり座っているだけで逆上せそうだ、みな目がガラガラしている。

王はテーブルの短い辺の真ん中に座りその逆位置にヒカリは座るよう指示され腰を下ろす。

皆が注目の眼差しでヒカリを見る。

ヒカリは耐えかねうつ向き小さくなっていた。

大河は変わらず能天気で、そんなに見られたら穴があくってなヒカリとジョウダンを言うが今のヒカリは笑えない本当に穴が空きそうだ。

そうこうしているうちに朝議が始まった。

最初に王の口が開いた。

「ヒカリよく来てくれた礼を言うぞ、皆の者知っておると思うが木ノ葉 ヒカリ殿だ今朝の朝議に参加するよいな」

と王が言った後、次々と皆がヒカリに挨拶した、その後朝議はヒカリを無視し進んでいく。

『何か凄い所に来ちゃったなあ・・・』

ちらっと大河を見ると涼しい顔をして朝議を聞いている。

『大河ってやっぱ大者だ！それとも、馬鹿かどっちかね。てっそれどころじゃなかった！』

とどうでも良いことを緊張のせいか考えてしまう。

「ヒカリどう思う？」

と急に王から話を振られ

「えっ！分かりません」

とヒカリはうつ向くそれを見た上官達はため息をつく。

「少しいいかなあ」

とヒカリから左側の真ん中に座っていた男が言った。

「おい、琢磨やめろ！！」

と周りにいる者が止めるが聞かない。

関 琢磨（セキ タクマ）はすっと立ち上がると背が高くガッチリしていて綺麗な顔立ちの男性だった物腰は軟らかで堅苦しくなくヒカリと一緒にこの場の雰囲気になじめないような雰囲気があった。

だが、誰もがヒカリとは違い彼を認めていた、彼の噂はヒカリも聞いていた城の女性が話すには若くして上官に上り詰めた若き天才で頭脳もずば抜けていいが剣の腕も立つということだ城の女性の憧れの君なんだとか。

「どうした関、朝議を止めるだけの話しなんだろうな」

と議長らしい人が釘をさすが構わず琢磨は続ける。

「ヒカリ殿に聞きたいことがある、貴方はこの世界をどうしたいとお考えなのでしょう。」

琢磨の言葉にその場は静まり返る。

「おい！関口を謹め」

「だが皆気になっているはず、この世界はヒカリ殿考え一つで変わることを貴方は我らにとって天使なのかそれとも悪魔なのか・・・

そもそもこの世界を救って下さる気がおわりですか？」

話しを聞いた皆がヒカリに注目する。

皆の視線から逃げるように机の一点を見つめることしかヒカリは出来ないでいた。

そんなこと今まで一度も考えていなかった。

この世界にとって光の者とはなんなのか、いや考えないようにしていたのかもしれない考える切

っ掛は幾らでもあった時間も・・・。

この1ヶ月考えることを拒否し逃げていたツケが今回って来たのだ。

何故急に朝議に出ろと言われたのか今考えると分かるヒカリは今カゴの中の鳥なのだもう逃げることは出来ない。

「ヒカリ済まないな。

本当の所を言うと私もヒカリの気持が知りたいこの世界のためにも」

と王がヒカリを真っ直ぐ見て言った。

「おい！あんたら無責任すぎじゃないか？」

とさっきまで黙って聞いていた大河が口を開く。

「どういうことだ狼 大河話によっては只じゃ済まねえぜ」

と一人のごつい体のむさ苦しい男が殺気とともに言う。

大河は怯むことなく。

「だから言ってるだろ無責任だって、お前らヒカリに何もかも押し付ける気か？
逆に聞きたいぜあんた達はこの世界をどうしたいのか？戦争は終わらない貧富の差は開くばかりだ」

上官達の顔色が変わり無言のままうつ向く、一人の上官が耐えかね。

「だが我らとて手を尽くしている、何もしてない訳ではない！！」

「だが、結果が出ねば同じことか・・・。
ヒカリ悪かった私達に落ち度がある」

と王が頭を下げたことにより騒ぎは収まったように見えたが琢磨は納得していないようで不服そうにヒカリを見ている。

その後ヒカリは退室を許され朝議が行われている部屋を後にした。

「ヒカリ大丈夫か？」

と心配そうにヒカリの顔をを大河が覗き込む。

「うん、大丈夫だよ。いつもありがとう大河」

「ヒカリ無理するなよ逃げたい時は逃げればいいんだ、いずれ逃げたくても逃げられない時がくる。
だから逃げれる時に逃げて損わ無いぜ！！」

「なんか励ましてるのか脅してるのか分からない言葉だけどありがとう。」

「おう！」

大河は何も考えていないようで凄く考えている人だ、いつも知らないうちに助けられてる周りの信頼も厚い。

これも城で聞いた話だが狼家はこの国でも武芸の名門中の名門なだとか、大河は若き当主でこの国の警備を主に任されている。

それだけに任される仕事は無理難題が多く、他の上官が首を縦に振らないような仕事をいとも簡単にこなしてしまうとか、いつもの大河を見てるとノホホンとしていて本当かどうか疑問だが。

はあとヒカリはため息をつく。

大河は逃げればいいと言ったけど逃げてばかりもいけないのは分かっている。
ヒカリはリンを部屋に残し庭を気分転換に散歩していた、勉強に身が入らないヒカリを見かねて
リンがヒカリを部屋から追い出したのだ。
外は風が吹き日差しが柔らかく注いでいる。

「ヒカリ見っけ！」

と何処からかジンが獣の姿で現れた。

「ジン！もう体調は良いの？」

「この通りピンピンしてるよ」

と飛びはねアピールする、毛並みも良くなり1ヶ月前よりふっくらしているように見えた。

「ヒカリにはオレ感謝してるんだぜ、命のいや心の恩人だ！！なんかあれば助けになるからな言うてくれよ」

「うん、ありがとう」

「何か元気ないな何かあったのか？」

「別に何もないよ」

「そうか、なら良いけど」

ジンは納得していないような表情をしている。

ヒカリとジンが庭を見ながら回廊を歩いていると

「ちょっとアイラ花に水がまだじゃない」

「はい、只今」

と新人の女官らしい女の子がヒカリの前を大きな水瓶を持って通り過ぎようとした時だった。ヒカリの前で新人女官がつまずき転んでしまう水瓶は割れ水が飛び散りヒカリに水がかかりそうになるが、ジンがとっさにヒカリの前に出てヒカリの代わりに水を被るはめになった。

「ジン、大丈夫？」

ジンは頭から水を被りびしょ濡れになっていた。

「こらお前危ないだろ気をつけろよな」

と少し強い口調で放心状態の新人女官をジンが叱ると、その様子を見ていた数人の先輩女官が薄笑いを浮かべ姿を現した。

「これはヒカリ様申し訳御座いません。
お怪我は御座いませか？」

「大丈夫です」

「そうですか、それは良かったヒカリ様は良い側近をお持ちなのですね」

とちらっとびしょ濡れのジンを見ながらすました顔で不服そうにいった。
びしょ濡れのジンやヒカリをそのままにして先輩女官は

「アイラ早く立ちなさいこののろま！
亀にでもなったつもりなのですか、ヒカリ様に粗相をして只で済むとは思ってないでしょうね」

「申し訳御座いませんヒカリ様」

と新人女官は濡れた床に頭を擦り付け必死に謝る。

「もう良いですから頭を上げて下さい」

「お優しいお言葉だこと行くわよアイラ」

と嫌味を言うと女官達は城の中に入っていった。

「何だか感じが悪い奴等だな、絶対ワザとだなお一怖いね女の嫉妬わ結構あるのかこういうこと」

とジンは遠慮なくズバット言うがヒカリは聞いていなかった。
うつ向き拳をギュッと握り怒りを堪えるので必死だったずっと我慢していたのだ。

『皆な勝手に期待したり失望したりするけど私の気持ちを聞こうともしない私は光の者に何かなりたくなかった、ただジンを助けたかっただけこの世界がどうなろうと私の知った事じゃないわ。本当嫌な人達、私が何したって言うの好きでこんなところにいるわけじゃないのに、逃げたい逃げ出したい』

「ヒカリどうしたんだ？」

異変に気付いたジンがヒカリに声を掛けるが遅かった、ヒカリは急に走りだし見えなくなっていく。

「ちょっと待てよヒカリ！！」

慌ててジンはヒカリを追いかける、獣の姿のジンはすぐヒカリに追いついて来た。

「ヒカリどうしたんだ？」

「ほっといてよ！！」

「ほっとけるか！！おい、そっちは外だぞ」

ヒカリは城の裏門を勢い良く飛び出した、警備の兵士も急な出来事でボーゼンとしている。ヒカリは知らない道をひたすら走った何かから逃げるように・・・。
誰かがヒカリに問い掛ける。

また、逃げるのか？と

『うるさい黙れ！私のこと何も知らないくせに言いたいことだけ言わないで！！』

「ジン着いてこないでよ！」

「そんな顔してるやつほっとけないだろう」

久しぶりに走ったせいか息が上がる。
ヒカリは市場の入口の前で止まりゼイゼイ息をする体力の限界だった、足がだるく息が上がリクラクラする。

「大丈夫か？」

ヒカリとは違いジンは涼しい顔で聞いてきた。

「大丈夫だと思う」

ヒカリは息が落ち着くとトボトボ歩き出した。

「何処に行くんだ？」

とジンは聞くがヒカリは答えない。

市場はやはり活気があり賑わっている、ヒカリがいようがいまいがお構いなしだ。

ヒカリは人目をさけ裏路地にはいった、すると城からヒカリを探しに来た数人の兵士が市場を搜索している。

「さすがに対応が早いな」

とジンが関心する。

ヒカリは地面にうずくまり動こうとしない。

「ジン私って無責任なのかなあ？」

「どうだろうなあ、それはオレが決めることじゃない」

とジンは即答する。

「そうだよね。」

「でも、これだけは言えるぜヒカリはいいやつだ、誰がなんと言おうとオレはヒカリの見方だ！
！お前が道を間違ったとしても」

ジンはヒカリを見ずに真っ直ぐ前を見て言った。

少し顔が赤いような気がするが獣の姿では分からなかった。

「何か言えよ恥ずかしいだろ」

「ジン・・・。」

嬉しかった自分のままでいいと言ってくれるジンの言葉が

「さあ、めそめそしてないで行くぞ！！
せっかく外に来たんだ遊ぼうぜ、じゃん」

とジンは何処からか袋を取り出した。

「大河からくすねてきたんだ、何か美味しい物でも食べようぜ」

「ジンたら」

と久しぶりにヒカリは笑った。

ヒカリ達が立ち上がり行こうとした時だった目の前に薄汚れたマントを羽織った老婆が立っていた。

「貴方、何処かで・・・」

とヒカリが声を掛けるが老婆の答えを聞く事なくヒカリの意識は遠のいていく。

『私どうしたんろう頭が動かない』

横のジンを見るとヒカリと同じで虚ろな表情を浮かべている。

「馬鹿な娘だ大人しく城にいればよいものを」

ヒカリとジンは意識を失い深い眠りに着いた。

カツカツと暗い地下廊に足音が響く。

「太下このようなところにおこしになられては私が怒られます」

と警備の兵士が止めるが龍美は構わず地下に降りていき、迷うことなく一人で封印の間に入って行った。

中は薄暗く静まりかえり少し悪臭が残っている。

龍美は魔法陣の近くまで来ると上を見た、そこには鎖で繋がれグッタリしている月下の姿があった。

「お久しぶりです兄上、お加減はいかがですか？」

と龍美が月下に声を掛ける。

月下はゆっくり目を開け虚ろな瞳で龍美を見る、王を目の前にして驚た様子はない。

「何しにきた、俺はあんたの兄になった覚えはない」

「淋しい事を言うのですね。

今日は王ではなく龍美として会いに来ました、貴方になくても私にはある。

遥か昔に一緒に生を受けた一人きりの肉親だ、私と血が繋がっているのはもう貴方だけ私は永く生き過ぎた。

私達は光と闇、龍と交わったさい人の心の光と闇が別れた結果だ。

私は永い寿命を手に入れ、貴方は龍の力を手に入れた、だがそのせいで貴方の寿命は短い人の体では龍の力を押さえ続けることは負担がかかりすぎる。

貴方は体を取り替えることで生き永らえてきた、時に国を滅ぼせば救うこともある。」

「何が言いたい。」

少しの沈黙の後、龍美は答えた。

「貴方は知っているのではないですか？ 私達の行く末を龍神人の役目を」

「馬鹿なことを貴方が知らないことを俺が知ってる分けないだろう、どうかしてる。」

「そうかも知れない永い時のなかで私は太古の約束を忘れてしまった。神との約束を・・・
私の中の龍の力は弱まっているこの世界も終わりが近いのかもしれないな、済まなかった変なことを聞いて」

と淋しそうに龍美は言う、その龍美の姿にはいつもの威厳はない。

「失礼します」

龍美の側近が封印の間に入ってきた。

月下は少し驚いた今まで大河以外で尻込みせず封印の間に入ってくる者を初めて見た、誰もが恐れ入る事を嫌うのにいとも簡単に中に入って来たのだ。

それだけ龍美への忠誠心が強い証でもあった。

「どうした」

と側近の姿を見ると龍美が声を掛ける。

「はっ失礼ながら急ぎお伝えすることがあったためご無礼をお許し下さい」

と側近は頭を下げた。

「よい許す、申してみよ」

龍美は先ほどとは違い王の振る舞いをする。

「はい、今しがた門番からの情報でヒカリ様が城の外に出られたとか、兵を出しお捜ししているのですが今だに見つからない様子」

龍美と月下の顔色が変わる。

「ヒカリにはリンを付けていたはず、リンはどうしているのだ」

「リンの話しではヒカリ様はお一人で庭を散歩するため部屋を出られたとか、取り乱し外に捜しに行こうとしたため自室に閉じ込めてあります」

「そうか」

ガチャと鎖の音をする。

「お前らヒカリに何をした！」

龍美は月下を目を逸らさず真っ直ぐ見て

「朝議に出席してもらったのだ世界の為に、彼女には早く自覚してもらわなければと思った自分がこの世界において何なのかを」

「ヒカリの心を見せし追いつめたな！！」

「否定はしないだが悪かったとも思わない、それが私の役目だこの国の王としての・・・」

迷いがない言葉だった、王としての責任をとるため国を守るためなら犠牲は仕方ないと言い切った。

「クソー、お前らはいつもそうだ！！
国のためならと言い訳し人の心を見せし踏みつけていく、お前達に任せておけない鎖を外せオレが捜しに行く！！」

月下は鎖を引きちぎろうと暴れるが、龍美は月下と違い慌てることなく。

「少し頭を冷やせ、捜しても見つからないと言うことはもう誰かに囚われていると考えたほうがいい捜しても無駄だ。大河の報告を待て月下」

と龍美が言い終わると同時に

「その必要は無いぜ！」

皆が声がした方を見ると大河が立っていた。

驚くことに誰も大河が入って来たことに気づかなかったのだ。

「大河！」

月下が大河の姿を見て叫ぶ。

「お前あれから姿を見せないで何処にいったんだ！」

苦笑を浮かべながら大河は

「まあ怒るなよ月下ヒカリの情報仕入れて来たぜ」

「それは、誠か！！大河早く申せ」

龍美を見ると大河は畏まり。

「はっ、ヒカリ様を捜索中の兵士が市場の人通りがない裏路地にジンが気を失っている所を保護したそうです。

ジンの話ではヒカリはマントを被った小柄の老婆に連れ拐われたとか、マントには闇の印があったとその後ジンは一人で捜索に出たようです」

闇の印と聞きみな嫌な顔をする。

「闇人か厄介だな、今取締役中の人身売買にも絡んでいると報告があったな、人身売買の件は狼家が動いていたはず大河心当たりは」

「あります。王の許可があれば踏み込めるかと」

と大河は真剣な顔で龍美を見た龍美を試すような目で

少しの沈黙の後、龍美は迷いがない表情でゆっくりと噛みしめるように呟いた許すと・・・。

ゴトンゴトンと音がし体が左右に揺れる。

ヒカリは重いまぶたを上げる頭がもうろうとし上手く考えられない。

虚ろな瞳で周りをやっと思渡すと、煙のような靄がかかり箱のような室内に隙間なく活気がない人達が膝を抱え一点を見つめて座っている、とても静かで誰も口を開かない。

「私・・・？」

「あんた、まだ正気があるのかい」

と隣から誰かが声を掛けてくる。

声が出た方を振り向くとそこには、ヒカリと同じぐらいの年頃の皆と同じボロボロの服を着た少女が座っていた。

彼女は布のような物を口にあてながらヒカリに布切れのような物を手渡す。

「これで口を押さえて煙を沢山吸ってしまうとあんたもあそこにいる子達と同じになるよ、ほら早く！」

ヒカリは言われるがまま口に布をあてる。

「あのここは？」

「しっ！静かに監視に見つかったら殴られるよ」

と彼女が怖い顔をするので慌てて口を押さえる。

「あんた名前は？」

「ヒカリです」

「私はツバメで、これから売られる身の私達には名前も意味ないか」

と耳を疑う事を言う。

「ちょっと待って！どういうこと？」

ヒカリは慌てて聞き返す。

「あんた鈍いねこの状況を見れば分かるだろ、周りを見てみなよ年頃の若者ばかり金に困り子供を売ったのさ若い子は高く売れるからね、この隙間から外を見てご覧よ」

ツバメが指差した方を見ると雑な造りのお陰で板と板の間に指が一本通りそうな隙間が空いていた。

ヒカリは隙間を恐る恐る覗いてみると其処には荒れ果てた村の姿があった。
木々はかれ畑には草一本生えてはいない地面には痩せ細り餓えた人々が転がっている、室内でも
うろうとしている人達も、良く見ると痩せ細り髪や肌はボロボロで顔色が悪い。

「どうしてこんなことに」

ヒカリは思わず言葉を口にする。

「あんたみたいな裕福な家の出の娘さんには分からないだろうね」

ツバメはヒカリが身につけている物を見ながら言った。
城の人達は自然に着ていたので気づかなかったが、ヒカリが着ている洋服は市民にとってはとても高価な物だった。

「ごめんなさい・・・」

と反射的にヒカリは謝る。

「この国は永い戦争でどんどん貧困の差が激しくなって来ているんだ、都心に住んでる奴等ぐら
いだよ裕福なのは皆毎日食べるだけで必死さ」

ヒカリはとても胸が苦しくなった、自分が城で何不自由なく贅沢な暮らしをしていた時に城の外
がこんなことになっていたなんて思いもしなかつた。

「大丈夫？ごめん私言い過ぎちまつたね」

「いえ違ふの自分が情けなくて、自分の事だけで精一杯だったのそのせいで周りを気づ付けてい
たことを知っていたのに知らん顔して過ごしてた・・・」

ヒカリの瞳に涙が溜まり溢れる。

「あんただけじゃないさみんな一緒さ、あんた欲張りなんだよ自分に出来ることからすればいい
こうやってウジウジしている間にもいろんなことが出来るんだよ、今の自分を大切にしなじゃな
いに見えるものも見えなくなるよ、もう泣かないでよ・・・あたいこう言うのは苦手なんだ」

とツバメはあつふたする。

ゴトンと大きな音を立て揺れが収まる。

「着いたみたいだね、あんたとももうお別れだ最後にあんたに会えて嬉しかったよヒカリ」

とツバメは優しくヒカリに微笑んだ。

「ツバメさん？」

奥で扉が開き薄暗い室内をランプが照らす。

「おっ今日は大量だな」

男が入ってきて品定めすると次々と乗っていた者を下ろす、ヒカリも同じように下ろされ両手足
を鎖で繋がれた。

外は夕日が沈んだばかりらしくまだ空が少し赤く染まっていた。

重い鎖を引きずり男に言われるがまま、古い潰れかけの城の中へ入っていく、男達に監視され逃
げようものなら直ぐに連れ戻された。

『私どうなっちゃうんだろう・・・
バカだな城を飛び出したりするからこんなことになるのよ自業自得ね、自分一人では何も出来ないのに皆の意見を聞こうとしないで一人でつばった結果がこれか・・・』

悲惨な状況がそうさせるのか自分が嫌になってくる。

ヒカリ達は薄暗い部屋に通され一列に並ばされると目の前のカーテンが開くとそこには、仮面を付け素顔を隠した身なりの良い男女が数名立っていた。

一人の仮面を付けた男が指を指すとヒカリと同じように列に並んでいた少女が部屋を出て行く、少女は仮面の男に買われたのだ。

次々と仮面を付けた者が人を買っていく異様な光景に言葉も出ない、緊張するヒカリの前に仮面を付けた小太りの男の指が止まる。

「ほら歩け！！」

監視役の男がヒカリを奥の部屋に連れて行こうとする。

「イヤ！離して！」

ヒカリは抵抗するが男の力には勝てずズルズル引きずられて行く。

「こいつ！煙を吸わなかったな」

「元気があってよい無抵抗なのも面白くないからな」

とヒカリを買った男が仮面の奥で嫌らしい目をしてヒカリを見ながら言った。

これから自分の身に起こることを考えるとヒカリはゾッとした。

「イヤ！」

より一層手足をばたつかせ抵抗するが二人の男に両脇を抱えられ部屋に連れて行かれると、何かを嗅がされヒカリは頭が動かなくなり抵抗出来なくなる。

なされるがまま身なりを整えられ豪華な造りの部屋のベットにヒカリを寝かすと監視役の男達は部屋を出て行った。

ヒカリは何も考えることが出来ずただ天井を見つめていた。

「ヨゼフ様ありがとうございます」

料金を受け取った黒いマントの老婆が小太りの身なりのいい男に頭を下げた。

「良い買い物をしたわい」

とヨゼフが控え室らしい部屋のソファーに座り煙草をふかしていると怪しい黒い影が忍び寄る。ヨゼフが気配に気づき後ろを振り向くと、其処には赤毛の癖のある髪を優雅になびかせながら世にも美しい顔をした男が立っていた。

「あんた誰や！」

と椅子から飛び跳ねるように立ち上がったヨゼフが恐怖を抑えきれず狼狽えた声で言った。

「見た目より動けるんだね以外だったよ、でも僕からは逃げられないよ」

と赤毛の男が言うとヨゼフの体が動かなくなる。

「どうなっているんだ！助けてくれ金なら幾らでもやるから」

ヨゼフが恐怖の余り叫ぶが赤毛の男は聞いていない。

「ちょっと気持悪いだろうけど我慢してよね」

と言うと黒い影の様なものが何処からともなく飛び出しヨゼフの口の中に入っていく。その様子をさっきヨゼフから料金を受け取った老婆が扉の隙間から覗いていた。

「入っておいでよ」

老婆は部屋に足を踏み入れる、床でもがき苦しんでいるヨゼフを見ても顔色一つ変えない老婆の姿を見て鼻で笑いながら

「落ちぶれたねユーリスのキリコだったあなたが闇に手を染めるなんて、今では麻薬と人身売買を取り仕切る闇人の幹部か」

「キリコなんてものに未練はないよ、息子を殺された時にキリコの私は死んだのさ今はヤマバアで通ってる」

「何だいその呼び名センスのカケラもないね、まあいい喜びなよあんたの可愛い孫が近くに来てみたいだよ」

と老婆の反応を楽しむかのように言う。

「若い癖に話が長いね黙りな！！言われなくても分かっているそのためにあの娘を連れて来たんだ来て貰わなくては困る、私は行くよ上手くやるんだね」

と言うと老婆は部屋を出て行った。

「さあ、楽しませておくれよ」

と赤毛の男は老婆を見送った後、不気味に微笑んだ。

月下達は人目をさけ城の裏口にいた。

ヒカリが拐われたことは極秘にされていたからだ。

支度を整えた月下達は城を出て行った、その姿を城の中から龍美の側近のサラは浮かない表情で見送っていた。

その表情をみて龍美は

「納得いかんかサラ」

「いえ、太下がお決めになられたこと私は貴方に従うまでです。

ですが・・・狼家が月下を無断で隠していたこと見てみてみぬふりは出来ません、王の命に背いたことに違いはないのですいつ牙をこちらに向けても可笑しくない一度あることは二度あるのです太下」

「それはない、お前にも言っていなかったが月下を連れ去るよう命じたのは私だ」

いつも冷静で感情を表に出さないサラの眉が動いた。

「是です太下！月下を封印の間に閉じ込めたのは太下ご自身の命だったはず」

「そうだ、その頃私の周りの者は月下を憎み恐れていた先代の月下の時代黒龍は暴走し国を滅ぼしかけたからだ、それに幼い月下は黒龍を体に宿したさいに暴走仕掛けている皆また暴走するのではと怯えていた中には幼い月下を殺してしまおうと考えるものも出て来たのだ月下の身を案じた私は月下を封印の間に隠した、

だが先代の狼家当主が月下を預かりたいと言ってきたのだ私は狼家にかけたのだ、今までの月下達は戦争の道具として扱われてきたせいで何かが欠けていた私の考えは間違っていなかった今の月下は優秀だ儀式のさい暴走仕掛けたが黒龍を抑えこんでみせた今までの黒龍は一度の暴走でみな命を落としている、

それに狼家で過ごしたお陰で人望もあるあの月下は優しさや愛を知っている人に近い存在、闇そのものであるはずの月下の中に光が存在しているのだ、面白いと思わないか？

さらに光の者も現れたこの世界は救われるかもしれない」

龍美は目を細め空を見上げ真剣な表情で思いに更ける。

『長かった、私は長い寿命のお陰でこの国の行く末をずっと見てきた沢山の者と出会いそして別れを繰り返し時を重ねていく、一人置いていかれる淋しさは年を重ねるごとに増して行き私は一人なんだと何度絶望したことか、自分の命の期限を知った時私は可笑しくなったのだこのまま死んで行くのかと龍神人や王ではなく龍美として何かこの世に私が生きた証を残したかった私の最初で最後の過ち』

凄い勢いで月下と大河は町で調達したクアバと言う地を走る鳥のような動物の背に乗り走らせる
その後ろにライラが続く。

「大河まだなのか！」

「もうそこだ、おいジン待たせたな」

大河が木の上で空を見上げるジンを見つけて手を振る。

「おせーよ！」

と待ちくたびれた様子のジンが木から降りてくると月下の姿を見て

「アンタが月下か」

と興味津々で月下を見た。

月下は構わずジンに詰め寄り服の首のあたりを力任せに引っ張る。

「ヒカリはどこだ！」

ジンは行きなりの月下の行動に驚きながらも

「おい！落ち着けよ慌てると上手く行くこともいなくなるぞ堂々」

と月下を馬のようにあやす。

「お前なめているのか！」

月下はさっきより、より一層頭に血が登っているその様子を見かねた大河が

「おい月下！ふざけてるのはお前のほうだ少し落ち着けて、ヒカリのことになるとすぐこれだ
心配してるのは俺やジンも同じなんだよ」

月下はジンから手を離す。

「悪かった」

と素っ気なく誤る。

ゴホンゴホン解放されジンが苦しそうに咳をする。

「それで、謝ったつもりかよ！！まあいい時間がないからな」

月下を睨みながら言った。

「あそこだよ」

とジンが指を指した先には、錆びれた城が立っていたかつては貿易のさいに品物を検査するために使われていたが戦争が続き使われなくなったのだ。

「こんな所に城が・・・あれはなんだ？」

と目敏く月下が気づく。

「あれは飛行船だ、やっかいだなあ闇人はラオスの幹部と繋がっているらしい、前に一度見た事があるあれを動かすことが出来るのはラオスでも地位が上の者だけだ」

「ラオスかいのかジン？」

と大河がジンに気をつかうジンは元々ラオス側の兵だ。

「大丈夫だ、オレみたいな下っ端の兵まで覚えてるわけないって」

と心配をよそに何も感じていないようだった。

「そうか、無理するなよ」

と大河

「ああヒカリには借りがあるからな、死なれたら困るんだよ今度はオレがヒカリを助けるばんだ」

とジンは城を見上げながら言う。

「ジンと月下はヒカリを探して城へ俺は周りを固めるライラは琢磨を連れてこい、飛行船が出たら手が出せないからな」

大河の的確な指示が飛ぶ。

「動いてくれるのか？あの関 琢磨だろヒカリを焚き付けた張本人、腕は立つが堅物でラオスでも有名だ大河お前結構やり手だな」

と状況の把握と早い対応にジンは関心する。

「おう！と言いたいが俺じゃない琢磨を動かすにはちょっとしたコツがあるのさ」

と大河は得意げに言った。

「さあ、行こうヒカリが待ってる」

と大河が言うと二人は頷いた。

月下とジンは城の中に入り監視の目を潜り抜け城の奥に入っていく、城の中は薄暗く視界が悪かったが月下達の姿を暗がりが見えてくれた。

さらに奥に進んでいくと灯りが付いている部屋から男達の声が聞こえてくる。

部屋を覗くと男達が虚ろな表情でへらへらと笑ながらパイプから煙を吸っている。

「おいあれ麻薬じゃないのか？ユーリスでは禁止されてるはず、こんな奴等が安々と手に入る品物じゃない」

とジンは眉を潜める。

「あいつ等をのしてヒカリの居場所吐かせるか」

と月下が部屋に乗り込もうとした時だった。

「なんか甘い香りがしないか？」

とジンが鼻をヒクヒクさせている。

「こっちだ！」

とジンは勝手に匂いのするほうへ走って行く。

「おい、バカ猫！どこに行く、くそー！」

と仕方なく月下もジンの後を追うと、はっきりと人の鼻でも分かるぐらいの甘い花の香りが城の奥から漂ってくる。

「これは！」

月下は城の中央にある中庭にいた。

そこは一面に赤い花が咲き乱れていて赤い花はとても美しかったが、一面に咲いているせいか血の海を連想させ恐ろしくもあった。

「これはどういうことだ！これはカイマの花ユーリスでは咲かない花だ」

月下の姿を見てジンが近づいてくる。

「これを見ろよ魔法陣だ」

よく見ると庭自体が魔法陣を描いていた。

「ユーリスの土壌はカイマの栽培に適切ないが物質変化の魔法陣を使えば別だ、最近麻薬中毒者の数が増えたのはここが関係してるみたいだな、こんな高度な魔陣を使える者に心当たりはないのか？」

月下の顔色が変わり表情が険しくなる。

「あるキリコだ」

ジンは少し驚いた様子で

「馬鹿な、キリコと言えばユーリスの司祭だろユーリスを正しい道に導くのが仕事のはずだ、こ

んなことするなんて真逆だぜ」

月下は握った拳を更にギュッと握り怒りを抑えながら

「正しくは元キリコだ、この前の儀式の時に俺に襲いかかってきた」

「たいした司祭様だな、ユーリスも堕ちたもんだ身内に敵がいたなんてな滅ぶのも時間の問題だな」

月下が誰よりもユーリスの行く末を案じていることは知っていた、今までラオスがユーリスを侵略しようとしたが黒龍のせいで何度も失敗してきたからだ。

黒龍はいつも危険でかつ重要な任務にしか出てこない、いつも死と隣り合わせで戦っているそんなにまでして守っているものに裏切られて悔しくないはずがないそれを知っていてジンが嫌味を言うが

「そうかもな」

と月下からは素っ気ない言葉が返って来ただけだった。

怒らせ自分に怒りを向けさるつもりだったが月下は意外と冷静だった。

「おい大丈夫か！ここ怒る所だろ！！」

とジンが少し慌てる。

「これぐらい何ともない、この国には何度も裏切られてきている」

悲しい言葉にジンは肩を落とし

「そっか、お前も苦労しているんだな。

行って来いよ庭の中央に地下に繋がる階段があった魔法陣を維持するためにそこにきっとキリコはいる、ヒカリはオレに任せろ責任を持って助け出してやる」

少し月下は考え込んだ後

「分かった任せる」

と言うと地下の階段を降りて行った。

月下の後ろ姿を見送るとジンは、城に戻り庭に来る途中見つけた二階に通じている階段を登る。すると、またあの甘い香りが漂ってくる匂いをたどり進むと狭い部屋のなかで女達が麻薬の精製を行っていた。

中には作業の途中で麻薬に犯されたのだろう瀕死の状態で床に死んだように転がっている者や満足に食事を取っていな様で痩せ細りブルブルと体を振るわせながら仕事をしている者もいる。

手を止めると監視から鞭が飛ぶ。

「くっそ！人身売買で売れ残った奴等をここで働かせているのか！！助けてやりたが今派手に動いたらヒカ리를助けられない」

ジンは怒りの余り身震いした。

バシンと鞭の音が響く

「おい！お前薬を溢すなそれだけでいくらすると思っている！！」

と監視が女を怒鳴ると鞭を振り上た。

「待ちな！この子は具合が悪くて仕事出来る体じゃないんだよ休ませておくれよ！」

と隣にいた者が女の前に出て庇う。

「煩い、知ったことか！」

と構わず監視が鞭を振り下ろす。

『オレはまた見捨てるのか・・・』

これじゃ今までと変わらないじゃないか目の前の者を救えなくて国が救えるか！！
考えるから分からなくなるんだ今の自分がどうしたいかそれが答えだ！！』

と自分に投げ掛ける。

監視の鞭が女を捕らえる、ジンは飛び出し鞭を受け止めると不意を突かれた監視がバランスを崩した所にすかさず蹴りを入れる。

腹におもいきり蹴りを入れられた監視はそのまま後ろに倒れ込むと壁に頭をぶつけて気を失った。

それを見ていた後の二人の監視達がジンを囲む。

「早くかかってこいよそれとも怖いのか？」

とジンが言うと

「くそ一馬鹿にしゃがて」

とジンに襲いかかるが麻薬で体がボロボロのせいで動きが鈍い男達は、ジンの動きに付いてこれず殴りかかるが空振りする、透かさずジンが息が上がりフラフラしている監視に止めを刺す、バタバタと監視達は床に倒れ込んだ。

「はあはあ」

と急に動いたせいで息が上がる、その時だったジンの背後から隠れていた男が襲い掛かってくる。

「危ない！」

と誰かが叫ぶ。

ジンが振り返るが間に合わないと覚悟を決めた時、黒い影が男に襲いかかるバンという音とともに男の体は床に叩き付けられ気を失った。

男の上にライラが自慢げに座っている。

「ライラ戻ったのか助かったぜ」

その様を見ていた威勢のいい女が歓声を上げる。

「あんた凄いじゃないか！！」

「うるさい黙ってろ！他の奴等に気づかれるだろ」

とジンが注意しながら女の方を振り向くと
うるうると女の瞳が揺れる。

「ジン様！！」

と急に抱きついて来た。

突然のことにジンは交わすことが出来ずくつつく女の頭を引き離そうと押し返すが離れない。

「ジン様、私ですツバメです！」

名前を聞いてはっとする聞き覚えのある名前だった。

昔、妹に会いに行くと世話係をしていた女官の名前がそんな名前だった

「ツバメてあのツバメか？アリアの世話係の」

「はい、そのツバメです！！良くて無事でジン様！！」

とより一層抱き着いて来た。

ツバメを押し返しなが

「おい、何故お前がここにいるアリアはどうした？」

ツバメは浮かない顔をし言葉に詰まるとうつ向いてしまう。

その様子を見てジンはツバメの頭を優しくなげた。

「また後でゆっくり話を聞くよ今はここから脱出するのが先だ。

ツバメ、力を貸してくれ」

「ハイ」

と今度は顔を上げはっきりとした声で答えた。

「なあツバメ、ヒカリって言う名前の女見なかったか」

「なぜヒカリをジン様でご存知なんですか？」

「知っているのかヒカリが何処にいるか分かるか？」

「ハイ、ヒカリは太った嫌味な男に買われたんです。

奥にある客間に連れていかれたみたいです、さすがにどの部屋に入ったかまでわ・・・」

「そうか片っ端から探すしかないな、

ツバメお前はここに残って脱出する準備をしろ、もうすぐ援軍がくるもう少しの辛抱だ」

ザワザワと他の女達がジンの周りに集まってくる。

「それは本当かい！」

「これで助かるんだ！！」

と喜びの声が聞こえる。

「ライラこいつらを頼む」

「分かった」

「ジン様お気を付けて」

とツバメが心配そうに声を掛ける。

ジンは部屋を後にし客間を片っ端から調べるがヒカリの姿はない

「ヒカリどこにいるんだ」

最後の部屋を調べ終わりふと部屋の隅に目をやると、砂の様な物を伝い火花がバチバチと音を立てながら移動している。

「何だ？」

とジンが近づいた時だった。

バンという音と共に火花が弾け近くに置いてあったかめが割れ、中の液体が溢れ出すとジンの目の前で勢いよく炎が上がる。

「嘘だろう！！もう少し近づいていたら火だるまになってたぜ」

想像するだけで背筋が凍る。

バンと大きな音が他の部屋からも聞こえてくる。

「はめられた！！だから警備が手薄だったのか麻薬や女達は罠でオレ達もろとも城ごと証拠を消すつもりだな、そうするとヒカリは飛行船か！！」

ジン達は踊らされていたのだ目先のものに囚われ先にある真実が見えなくなっていた。

「くそ一馬鹿にしゃがって！！」

と心をからジンが悔しがる

「ジン大丈夫か？」

と騒ぎを聞き付けたライラがジンのもとに走ってくる。

「ああ、ツバメ達は無事か？」

「大丈夫だ皆避難した」

「さすが仕事が速いな、ヒカリは飛行船だオレは上に登る階段を探すライラお前は月下を頼むこの様子じゃ月下も危ない、中庭にある地下に月下はいる」

「分かった」

と言うとライラは走り去った。

「さっき見た様子だと飛行船のエンジンが暖まるまでまだ時間がかかる、間に合ってくれ」

とジンも火の海とかした城の中に消えて行った。

月下が長い地下に通じる階段をゆっくりと警戒しながら降りていくと広い空間に出た、地面には地上で見たのと同じ魔法が描かれている。

「いるんだろキリコ！」

と誰もいない空間に月下が叫ぶ。
何処からか黒いマントを被った老婆が現れる。

「来ると思っていたよ」

「やっぱりあんたかキリコ」

「その名前はとうに捨てたよ」

と追い詰められた者とは思えないほど落ち着いた口調で答える。

「名前何てどうでもいい、これはどういう事だ！カイマの栽培し何を企んでいる」

「決まってるだろ私の人生を狂わせたこの国に復讐しているのさ、麻薬でどんどん病んで行くこの国を見るのが楽しくてね」

老婆は不気味な薄笑いを浮かべる。

「ふざけるな！お前が憎んでいるのは俺だったはず、殺されたくなかったら早くこの魔法陣を解け！！」

と月下が刀に手をかける。

「おお怖い、だがあながち間違っていないよこの魔法陣は私が死なないと解けないように細工してあるのさ、さあ私を殺しなアンタに出来るのかいお優しい月下様」

「俺は・・・」

月下は刀に手をかけたまま動かない、悪人とはいえ自分の祖母を手にかけることを躊躇う。

『この人がこんな風になっちゃったのは自分のせいだ、父上や母上が生きていればこんな事にはならなかったかもしれない、だがこの人を止めるのは俺の役目このままにしてはおけない』

月下はゆっくりと刀を抜く。

「ほ一、祖母に刀を向けるか矢張り悪魔の子じゃったか！本性表しよったわい」

月下は動じず刀を構える。

「何を今更、俺は悪魔の子だ間違いない、この身に闇を宿し父や母を殺し皆に恨まれながらも生にしがみつki生きてきた！！

何度死んでしまおうと思ったか、だが俺には支えてくれる友がいた、だから今まで生きて来れたんだ！！

そいつらの為なら死も怖くないこの国を守ることが俺が生きている意味、誰であろうとそれを壊す奴は許さない」

月下は覚悟を決め刀を持つ手に力を込め動こうとした時だった。

バンと言う音と共に天井が崩れ落ちる。

揺れが酷くバランスを取り立っているのがやっとだった。

「あの男はかったな！！この城ごと証拠を消すつもりか」

「どういうことだ！」

「鈍い子だねこの城が崩れるって言ってるんだよ、早く行かないとあんたも岩の下敷きになるよ」

月下が入口を確認しすると、かろうじて崩れ落ちた岩に塞がれていなかった。
もたもたしている月下を見て

「早く行きな」

と老婆。

「あんたはどうするんだ逃げないのか」

どうしてそんな言葉を掛けたのか月下にも分からなかった。

「逃げる意味なんてないよ、私の居場所は地上にはないもうこの地下だけが私の居場所」

「そんなこと言うなよ！作ればいいだろ生きていれば幾らだって作れるさ要らない人間を神は作ったりしない！」

と月下が声を掛けるが老婆は動こうとしない。

どんどん揺れは酷くなり天井が大きく崩れ落ちる、月下は後ろに飛びかろうじて避けるが老婆の姿は岩に阻まれ見えなくなった。

月下は岩を少し眺めた後、地上を目指し階段を登っていく。
岩の奥で彼女は静かに立たずんでいた。

「馬鹿な子だね、自分を殺そうとした人間の心配をするなんて・・・
優しいところは相馬に良く似ている」

と目を細める。

ふと地面に目をやると小さな丸いユーリスの刻印が入った鏡が転がっている。
鏡からゆっくりと光が現れその中から人影が見える。
彼女は来ることを知っていたかのように驚く事なく。

「矢張り来たね龍美」

龍美は、悲しそうな表情で愛しそうに老婆を見詰めるとゆっくりと口を開く

「一言貴女に謝りたかった、こんなことになってしまったのも全部私のせいだ罰を受けるのはこの私」

「ふふふ」

と老婆は笑う。

「綺麗事を言わないでくれ！！
いつもそう貴方は私を庇おうとする、それが私を苦しめるのよ分からないのかい！！馬鹿な男」

と荒々しい口調で訴え掛けるように言うが、龍美は構わずゆっくりと老婆に歩み寄る。

「来るな！私に近づかないでくれ貴方にこんな醜い私を見られるのは・・・」

とマントのフードで顔を隠してしまう。

龍美はそれでも足を止める事なく近づいて行く、手を伸ばせば触れられる距離まで来ていた。

「貴女は醜くなどない、美しい今もこれからもずっと」

「嘘よ！騙されるもんですか私を憎んでいるんでしょ、この国は貴方そのもの私はそれを壊したのよ！！」

龍美は優しく老婆の体を引き寄せを抱きしめる。

老婆の瞳から涙が溢れ落ちる。

「貴女の泣き顔を見るのは何回目だろう、私は泣かせてばかりいるね貴女には笑顔が良く似合うのに」

「なぜ来たの？私は国を貴方を裏切ったのよ」

と龍美にしがみ付く。

「そうさせたのは私だ全部私の罪なのだ、私が貴女を愛してしまったから最初で最後の過ち、だが後悔はしていない貴女を愛した事で私の心は救われた貴女を不幸にってしまったけれど・・・」

とフードに隠された頬に手を当てる。

「嫌！取らないでお願い」

と力なく拒むが

「嫌だね、私は我がままなんだ知ってるだろ？」

と言うとかまわずフードを取ってしまう。

しわくちゃだった老婆の顔は若い娘の顔になっていた。

「私の瞳に映る貴女は、何時までもこの姿のままさ、笑っておくれ泣いてる顔は見飽きたよ」

と優しく囁く。

「本当に我がままな人ね」

と蛍は微笑んだ。

「愛しているずっと永遠に・・・」

龍美が優しく蛍の唇にキスをすると蛍の体から力が抜けて行く
蛍の姿は龍美の腕のなかでもとの老婆に戻っていた。

「お休み愛しい人・・・」

と龍美が呟いた後、天井が完全に崩れ落ち二人の姿は見えなくなった。

ジンは城の壁を登っていた、階段は破壊され屋上に繋がる入口は塞がれていたからだ。

「くっそー！！階段なんてないじゃないか」

そこに地下から月下とライラが現れる。

「何してるバカ猫！！」

と月下がジンに叫ぶ。

「おっ、きやがったな、だが言い返す言葉もないぜ・・・
見りゃ分かるだろ登ってるんだよヒカリは飛行船だ」

と首だけで後ろを振り返った時だったガンと頭に衝撃が走る。
ドスンとジンは地面にお尻から豪快に落ちる。

「いててて、何するんだよ！」

と上を見上げると月下が屋上に立っていた。

「動きが鈍くなってるぞ、お前カイマを吸ったな」

城の中は火災のせいでカイマが燃え煙が充満していた、その中を走り周り階段を探していて煙を吸ったのだ。

「ライラ、ジンを連れて先に戻ってろ足手まといだ」

と言い捨てると姿が見えなくなった。

「行くか」

とライラがジンに気お使いながら言葉を掛ける。

「情けないがあいつの言う通りだ」

ジンはライラの背に股がり城を出て行った。
月下が近くまで来た時には飛行船は空に飛び出そうとしていた。
ハッチをこじ開け中に入ると同時に機体が宙に浮く。

「ヒカリ無事でいてくれ」

月下達が城に来てかなりの時間がたっていた。

扉が開く音がし人が入ってくる、ヒカリは身を起こし身構える。

「待たせたね」

と言いヨゼフがヒカリがいるベットの上に上がってくる。

「嫌！来ないで」

ブンブンと側に置いてあった枕を振り回し暴れるがヨゼフはびくともしない。

「元気があっていいが少し暴れ過ぎだ、可愛い顔が見えないじゃないか」

体に似合わない素早い動きでヒカリの喉元を掴みそのままベットに押し倒す。

「があは」

苦しきの余りヒカリは声を漏らす。

「おっとやり過ぎたかな」

ヒカリが苦しむ姿を見てヨゼフは、嬉しそうに口元が緩むが目は笑っていなかった。
ヒカリは恐怖のあまり体がブルブル震えているのに気づく。

『こ、殺される！！』

ヒカリは夢中で足をばたつかせる。

「暴れても無駄だよ、君はもう僕の物この檻から出ることはない、ここから出ることが許されるのは壊れた時だよ」

ヨゼフがヒカリの首もとに顔を寄せた時だったガタンと大きく部屋が揺れた。

その揺れのせいでヨゼフの動きが止まり手の力が少し緩んだ瞬間、ヒカリはヨゼフの顔めがけて
づつきを入れる。

ゴツンと言う音とともにヨゼフの体がベットからころげ落ちる。

「くそ一小娘」

とベットの下で頭を抱えている、頭に衝撃を受けたせいで直ぐには立ち上がれないようだ。

ヒカリはベットから飛び降り扉に駆け寄るとノブを回し開けようとするが鍵が掛かっている開かない。

誰かと扉を叩くがビクともしなかった。

ヒカリは諦め部屋の中を見渡すと小さな窓が付いていた、近くにあった椅子を持ち上げ窓ガラスにぶつけるがガラスは硬くなかなか割れない。

「無理だよ、そのガラスは特注だね」

ゆっくり立ち上がったヨゼフの体から黒い煙の様なものが上がっている。

はあはあと息を切らしヒカリはヨゼフを真っ直ぐ見た。

「貴方何者なのさっきの嫌らしい叔父さんじゃないわね」

とヒカリが言う。

「さすが光の者と言った所か、だがもう遅い大人しく私の物になれ」

「嫌よ！」

「ほーだが、家族から逃げユースからも逃げ出したお前に生きていても居場所など無いぞ」

ヒカリの表情が曇る。

「それは・・・」

ヒカリの心の隙間に闇が忍び込む。

「それは何だ？

認めるのか自分は無責任で嫌なやつ何だろ、心を閉ざせ誰もお前を必要としていない、居なくてもいい存在なんだろ認めてしまえよ楽になれ」

心を読み闇が語り掛けてくる、ヒカリの瞳から精気が消えていく。

「そういい子だ」

赤毛の男がヒカリの背後から現れると、力なく立っているヒカリの体を抱き止める。

ヨゼフの体は闇に吞まれて魔物に姿を変える。

部屋の扉が壊され月下が飛び込んでくる。

「ヒカリ！！」

「この騒ぎの原因は君か」

と落ち着いた様子がより一層男を不気味に見せた。

月下は男の腕の中にいるヒカリを見て殺気だつ。

「ヒカリに何をした！その汚い手を放せ！！」

「嫌だね、私の主人が娘を連れてこいって言ってるんだよ連れて行かないと僕が怒られる、行け！！」

と言う言葉を合図に魔物とかしたヨゼフが月下に襲いかかる、とっさに月下が紙一重で避けると魔物の拳が床を破壊する。

「凄い腕力だな、当たったらヤバイ」

月下は距離をとり魔物の隙を探す、体が大きい分パワーはあるが動きが大きい。
魔物が拳を振り上げ月下をめがけて振り下ろした瞬間、月下は勢いよく胸元に飛び込むと床を蹴り勢いを付け喉元をめがけて刀を突き刺す。
魔物は喉元を刺されたせいで息が出来なくなり床で首を抑えながら苦しんでいる。
月下は透かさず止めを刺す、魔物は動かなくなった。

「やるね、そんな小者じゃ相手にならないか、次は僕がお相手したい所だがもう時間がないみたいだね君、エンジン壊しただろうもうすぐこの船は沈む、今回は諦めるとするよまた会おうお姫様」

とヒカリに優しく囁くと赤毛の男はヒカリを置いて闇の中に消えて行った。

「ヒカリ大丈夫か！」

と月下がヒカリを抱き上げ体を譲ってみるが反応がない、ヒカリの心は閉ざされ闇に覆われている。

月下は自分の左手首を切り血を口に含むと、躊躇う事なくヒカリにキスをし口移しで飲ませる。ヒカリの喉が動き音がする。

「ヒカリ？」

徐々にヒカリの頬に赤みがさすと虚ろな瞳で月下を見た。

「初めて私の名前呼んでくれたね」

と手を伸ばし月下の頬に触れる。

「温かい・・・」

「良かった」

と月下がヒカリを抱き締めるとバンと月下の頬に衝撃が走る。ヒカリの平手打ちをくらったのだ。

「助けてやったのに、なんてことするんだよ！！」

と月下は左頬を抑え訴える。

「だって急に抱き付くんだもん」

とヒカリは反省した様子はない。

「こいつ！」

「ほらまた、私にはヒカリて言う名前があるのちゃんと名前と呼んでよね！」

と謝るところか抗議する。

月下は気を取り直し

「まあいい、早く立て脱出するぞ！この船は次期に沈む」

とムツツリしながら月下が言う。

「えっ！どういうことよ！わたし今飛行船に乗ってるの？」

とヒカリは驚く、月下はあきれながら冷たい目でヒカリを見る。

「お前は知らないで乗ってたのか、本当に能天気な女だな」

「仕方ないでしょ！意識が無かったんだからどうでもいいけど急ぎましょ！！」

「一時休戦だな、この先に表に出る出口に繋がる通路がある行くぞ」

と月下はヒカリを抱き上げると走り出す。

「ちょっと何するのよ！」

とヒカリは暴れる。

「うるさい！こっちのほうがり速いんだ、今度は叩くなよ」

月下は通路を駆け抜ける、その後ろを何かが追いかけてくる。

「何だ！？何か着いて来てる」

と月下が気づく。

「怖い事言わないでよ！」

「出口だ！外にでるぞ」

外に出ると風圧で髪や服がバタバタと音を立てる、少し気を抜いたら飛ばされそうだ。
ヒカリを下ろした時だった、殺気に気づき月下が振り向くと闇の塊が月下に襲いかかる。

「月下！」

間一髪のところまで刀で闇を抑える。

「お前あの魔物にとりついてた奴だな、黒龍の力舐めるなよ！」

と刀と闇の間に魔法陣が現れると闇を目掛けて光を放つ。

闇が怯んだ所を自分の血が付いた刀で闇を切る、闇は苦しむように波うち後退する。

はぁはぁと月下も息が上がる。

「大丈夫ぶ！？」

とヒカリが近づいてくる。

「バカ！来るな！！」

遅かった、闇はヒカリに狙いを定め跳びかかる、月下はヒカリを引き寄せ庇う。

闇は月下の左脇を切り裂き床に穴を開け下に落ちて行った。

月下の傷口は酷く痛みに耐え立っているのがやっとの状態だった、ヒカリの体に力なく倒れ込む
息は荒く汗も酷い。

「月下！」

「大丈夫だ大したことない、それより次が来るぞ」

月下が言う通り床の揺れが酷くなってくる。

「ヒカリ良く聞け、お前だけでも逃げるんだ船の先端に脱出用のポットがある」

「嫌よ、月下を置いて行くなんて！」

「早く行け死にたいのか！」

と月下が怒鳴るがヒカリは動かない。

「私も戦うは、私にも力があるんでしょもう逃げるのは嫌なの！」

とヒカリの瞳に迷いは無かった。

「本当に強情な女だな、だが嫌いじゃないヒカリ俺が魔法陣を描いたら強く願うんだ何でもいい強く願え！」

と言うと月下は刀を構えヒカリも月下を支えながら身構える。
床を破壊しながら闇が勢いよく飛び出してくる。

「今だ！」

魔法陣がヒカリの前に現れる。

「私はもう逃げない、私のせいで悲しい顔はさせたくないの大好きな人達には笑顔でいて欲しいから、自分に負けるもんか！！」

思いを魔法陣に乗せて放つ。

光をまともにくらった闇は弾け飛ぶその衝撃で二人も後ろに吹き飛んだ。

船がどんどん高度を下げ沈んで行く、その横を大きな大鷹がヒューと鳴きながら飛んでいる。その声を聞いた月下は

「ヒカリ飛ぶぞ！！」

「えっ、馬鹿言わないでよ！落ちたら死んじゃうわよ！！」

とヒカリが言うが

「大丈夫だ俺を信じろ」

ヒカリを船に残し空に飛び出す、月下は落下しながら両手を広げ。

「こいヒカリ！！」

真っ直ぐヒカリを見て叫ぶ。

『そんな目で見られたら信じるしかないじゃない』

「偉そうに命令しないでよ馬鹿月下！！」

ヒカリの心から迷いは消える。

覚悟を決め空に飛び出す。

「キャー！！」

と悲鳴を上げながら月下の胸に飛び込む、それを月下が受け止める衝撃で傷口が痛み少し顔を歪める。

飛行船は落下速度を上げ落ちていく。

「あれは？」

ヒカリと月下の下を大鷹が飛んでいる。

「来たな、ヒカリちゃんと捕まってるよ」

月下が両手を広げると羽音と共に近づいて来た大鷹の背にしがみ付く。

「助かったのね私達」

「ああ！」

ヒカリ達は風を切り空を駆け抜けるとマンタのような生きものの群れがヒカリ達と一緒に飛んでいる、ヒカリ達を歓迎するかのよう。

「ヒカリ見ろよ」

と月下が言う方を見ると

ユーリスの兵士が鳥の背に乗りヒカリ達を守るように飛んでいる。

暗い夜が明け太陽が登ってくると世界が輝いて見える、とても美しかった涙が出るぐらいに・・・

「私・・・」

「ヒカリこの世界はお前を必要としている、俺はこの美しい世界を守りたい大河や皆がいるこの世界を力を貸して欲しい」

と真剣な顔でヒカリを見た。

「でも、何をしたらいいのか私・・・」

とヒカリはうつ向く。

「大丈夫ヒカリなら出来るさ」

と月下は優しい笑顔でヒカリに笑い掛ける。

月下の言葉は魔法のようにヒカリの心を勇気付ける。

「うん！！私頑張ってみる前に進むためにも負けないんだから！！」

夜が明けて行く、ヒカリが顔を上げ空を見上げると微かに星が輝いていた。

焼け落ちた城の近くの草原に大鷹は降りた。
月下がヒカリを大鷹の背から下ろす。

ポンと地面に足が着くと何だか地面の感触が懐かしく思えた。
下に地面があるだけでこんなにも安心出来るものだとは思わなかった。

「おーい！！」

と叫びながら、ジンと大河がヒカリ達の姿を見つけ駆け寄ってくる。

「ヒカリ！！」

とジンは躊躇なくヒカリに抱きつく。
ジンの体から伝わる人の温もりがヒカリを安心させる。

「無事で良かった・・・。」

と言うジンの心からの言葉がとても嬉しいかった。ヒカリは思う

『ここには、私を心配し必要としてくれる人達がいる
私がこの世界を守る理由はそれだけで十分だ。
私は逃げられない、この世界は知らない世界ではもうないのだ。
ほってはおけない、この掛け替えのない友人達を守ることが出来るのは私だけなのだから・・・。
この人の暖かさを私は決して忘れない
自分から手離すことこそ罪であると知ったから
私は、逃げていた父や家族から自分のことしか頭になかった・・・。
人は一人では生きていけない、人を受け入れてこそ人は幸せになれるから・・・。
今回の事件のおかげで身に沁みて分かったことだ。』

「歩けるか月下」

と大河は月下に肩を貸す。

「たいしたことはない」

と言った月下の体からは、血が滴りポタポタと地面を赤く染める。

「早く止血をライラ」

大河は、月下をライラの背に乗せると後ろを振り返り

「助かったよ琢磨、リンにも宜しく言っておいてくれ」

と大河が大鷹に向かって言う。

ヒカリは耳を疑った。

大河は、大鷹のことを城でヒカリを責めた関 琢磨だという。

「琢磨て、城でお会いした関 琢磨さん！」

とヒカリは思わず聞き返す。

信じられなかった、あなにもヒカリのことを嫌っている様子だった琢磨が自分を助けてくれたことが！！

それも、城を自分勝手に逃げ出したのに・・・。

「何だ知らなかったのか？」

とのん気な大河

そう大鷹は関 琢磨の獣の姿だったのだ。

ヒカリは、覚悟を決め今度は逃げることなく琢磨の前に出た。

「ありがとう御座います。
関さんが来てくれなかったら私達は今頃・・・。
私・・・ずっと貴方に謝りたかった。
町を見て気づいたの自分がどんなに自分勝手に無責任なワガママを言っていたのか、
試練を受けると決めたのは私です。
ですが、この世界のためではなく自分のためだった」

『そう自分が存在している理由が欲しかっただけ。
ジンのためでもこの世界ためでもない、ただ自分の心を守るためだった。
でも、身勝手にも今度は自分に課せられた使命の重さに耐えかね逃げ出したんだ。』

琢磨は黙ってヒカリの言葉を聞いていた、何かを確かめるように。
他の者も静かにヒカリを見守る。
ヒカリは、今の自分の気持ちを伝えるために精一杯の言葉をぶつける。

「でも今は違うんです上手く言えないけど
今は私、仲間がいるこの美しい世界を守りたいと思っています。」

何かがヒカリの中で変わったことが感じられた。
以前のヒカリは逃げることしか出来なかったが、今のヒカリは戦うことを知っている。
未来が変わる小さいようで大きな違い・・・。

ヒカリの言葉を聞き琢磨は目を細め口を開いた。

「誤らなくてはいけないのは、私の方だ
私は貴女を追い詰め危険なめに合わせてしまった。
だが、考え知って欲しかったこの世界のことをそして貴方は答を出した
この世界の問いに・・・。
礼を言うヒカリ殿この世界に代わりに」

大鷹の姿の琢磨の表情は何い知ることは出来ないが、代わりに琢磨は大きな頭を地面近くまで下ろし礼の姿勢をとった。
琢磨が、ヒカリを認め忠誠を約束した証でもあった。
世界が大きく動き出す終焉かそれとも・・・。

その様子を大河が興味深げに見ていた。

『あの琢磨が頭を下げるとは以外だったな、
やはりこの世界の行く末はヒカリの働きにかかっているようだ。
重い枷をヒカリに背をわすことになる。
神は何をお考えしているんだ・・・・。』

「ヒカリ殿城にお戻りください、王が貴女を待っています。」

「でも私・・・」

とヒカ리는月下達の方を見た。

「まだ帰れません、私を助けるために皆を危険なめに合わせたのに、
ほって城に帰るなんてできない」

「ですが！」

琢磨が説得を試みるもヒカ리의意思は固く。

「必ず城には戻ると王にお伝え下さい」

少しの沈黙の後琢磨は、お伝えします。と一礼し空に消えて行った。
ヒカ리는その姿を見送り皆の方に振り向くと、

「お帰りヒカリ」

と誰かが言った。

あとかき。

モカです。

月のヒカリⅢ楽しんで頂けたでしょうか？

この辺りでお話は、折り返しといった感じになります。

次のお話では、心の交差をテーマに書いています。

どのようにして、登場人物が交じりあっていくのか楽しみにしていて下さいね。

前編では、離れ離れのことが多くあまりやり取りが書けていないのでどうなるか私も楽しみです！！

行き当たりばったりで書いているので（笑）

後、イラスト リクエストお待ちしております。

こんなシーン描いて欲しい、ヒカリの笑顔が見たいetc...

要望があれば教えてくださいね。お待ちしております！！

では今度は少しお時間が空きそうなので、次お会いできるのを楽しみにしています。

モカ